

# ソフィスト文書『ディッソイ・ロゴイ』研究（一）

中 澤 務

本論文の目的は、紀元前5～4世紀におけるソフィストの思想と深い関わりを持つ文書『ディッソイ・ロゴイ (Δισσοὶ Λόγοι)』を詳細に分析し、それが持つ思想的・歴史的意味を解明することにある<sup>1)</sup>。

この文書は、ソフィストの活躍していた紀元前400年頃に、ソフィストの影響下にある何者かによって執筆された文書と考えられるが、その内容は凡庸だと見なされてきた<sup>2)</sup>。それゆえ、当時の思想的状況を知るための歴史的資料として注目されることはあっても、哲学的なオリジナリティーが認められることは、少数の例外を除いて、ほとんどなかった<sup>3)</sup>。また、欧米でのそのような評価もあってか、わが国の西洋古典研究にあっては、考察の対象とされることも少ない<sup>4)</sup>。

本論文の目的は、このような状況に対して、『ディッソイ・ロゴイ』を再評価し、この文書が持つ重要な思想的・歴史的意味を指摘することにある。この文書は、ソフィストの時代の思想家たちの多層的な影響を受けて成立しており、この時代の思想の状況を伝えているばかりでなく、他の資料にはみられないオリジナルな論点を提示しているのである。

以上を明らかにするために、本論文ではまず、1. において、この文書をめぐる様々な問題を検討し、これがどのような文書であったのかを明らかにしていく。続く2. では、この文書の議論の内容を検討し、その目的を考察する。3. では、この文書が受けている思想的影響を詳細に分析し、それが紀元前5世紀の思潮の複層的な影響を受けて成立したものであることを明らかにしよう。

その後、4. では、この文書の前半の議論を詳しく分析し、そこに述べられ

る相対主義思想の内実と、その意義を考察する。5. においては、もう一つの重要な哲学的論点である、言葉と真理をめぐる考察を取り上げ、その独自性を明らかにする<sup>5)</sup>。

## 1. 『ディッソイ・ロゴイ』はどのような文書なのか

### 1.1 『ディッソイ・ロゴイ』の伝承

『ディッソイ・ロゴイ』は、懐疑主義哲学者セクストス・エンペイリコスの著作の写本に、不完全な抜書きとして保存され、伝承された文書である。セクストス以前の作家の証言の中に、この文書への言及は存在していない。おそらく、セクストスの著作の写本の伝承過程の中で、懐疑主義にとって価値のある文書として、何者かによって写本に書き写されたのであろう<sup>6)</sup>。おそらく、その人物は、『ディッソイ・ロゴイ』の前半部において示される二つの対立的な議論の提示の中に、懐疑主義的思想を読み取ったのだと推測できる。じっさい、セクストスは、プロタゴラスの思想を、懐疑主義との関連のもとで考察している<sup>7)</sup>。おそらく『ディッソイ・ロゴイ』も、プロタゴラスの思想に関連する主張をしていると見なされたのであろう。

このとき、記録者が、オリジナルの文書を、そのまま書き写したのか、それとも抜粋をしたのかは定かではない。ただ、記録者が抜書きしたと仮定した場合、懐疑主義とは関連が薄いようにみえる後半部の6～9章の部分をどうして抜書きしたのか、理由が明確ではない。おそらく、記録者の手元にはすでに現存する内容しかなく、彼はそれをすべて記録したと考えるのが妥当ではないだろう<sup>8)</sup>。

この文書が最初に公刊されたのは、1570年であり、出版者は、イタリアの出版業者ステバヌスである。彼は、この文書を、ディオゲネス・ラエルティオスの校本の付録として刊行し、そのさい、『ディアレクセイス (Διαλέξεις)』というギリシア語の書名を付し、この書名が一般化した。しかし、「討論集」という意味の書名は、その内容を正しく反映しているとは言いがたく、現在では、『ディッソイ・ロゴイ』という、この文書の前半部の議論に由来する書名のほ

うが一般化している。

## 1.2 著者は何者か

この文書の各章の記述に、文体的な違いを見出すことはできない。それゆえ、この文書は、同一の書物に由来するものか否かはさておき<sup>9)</sup>、すべて同一の著者によって書かれたと見なしてよい。

では、それは、どのような人物であったのだろうか。この点で、われわれが推測しうるのは、著者の出身地域と活動場所、および著者が受けている思想的影響などに限られる<sup>10)</sup>。このうち、後者の思想的影響については、次節で詳しく考察するように、ソフィストたちからの影響が大きいことは明らかである。それゆえ、われわれは、著者を、ソフィストたちの思想の影響を受け（あるいは、彼自身がひとりのソフィストとして）、何らかのソフィスト的な活動に従事した人物と推定することにしよう。

では、彼は、どこで活動していたのであろうか。その手がかりとなりうる情報は、この文書で使われているギリシア語の方言である。

この文書は、主としてドーリス方言（スパルタを中心としたペロポネソス半島およびエーゲ海地域の方言）によって執筆されているのだが<sup>11)</sup>、アッティカ方言や、特定不明の方言<sup>12)</sup>も含まれており、このような方言の混在を引き起こした理由が問題となる。考えられる可能性は、二つある。

一つは、著者はもともとドーリス方言の話者であり、この文書も最初はドーリス方言で書かれていたが、その後、アッティカ方言が混入したというものである<sup>13)</sup>。この場合、著者は、ペロポネソス半島のポリスの出身者であったが、アッティカ地方で活動した可能性が高くなる。

もう一つの可能性は、逆に、著者はアッティカ方言の話者であると想定する。すなわち、この文書は、最初アッティカ方言で書かれたが、その後ドーリス方言に書き直されたことになる。この場合、著者は、アテナイ周辺の出身であるが<sup>14)</sup>、ペロポネソス半島のポリス（あるいは南イタリアの植民市）で活動していたことになるだろう<sup>15)</sup>。

いずれの可能性が正しいかについて、決め手はない。ただ、いずれにしても、著者の活動地域が、ペロポネソス半島（あるいは南イタリア）とアッティカ地方にわたる広いものであったことは推測できる。これは、ギリシア世界を広く渡り歩いて活動を展開した、当時のソフィストたちの活動の実態に合致するものだといえるだろう。

### 1.3 執筆時期

この文書の執筆時期に関する唯一の手がかりは、アテナイとスパルタの間の戦争におけるスパルタの勝利が「最近の出来事」だと言われていることである(18)。言及されている戦争は、ペロポネソス戦争(B.C.431-404)である可能性が高い。その場合、この文書は、ペロポネソス戦争でのスパルタの勝利(404年)後、間もない時期に書かれたことになり、少なくとも、404年以前には遡れないことになる<sup>16)</sup>。じっさい、多くの研究者は、ペロポネソス戦争終了直後からの数年間を、成立の時期と想定している<sup>17)</sup>。

もっとも、この想定もまた決定的なものではなく、想定よりも以前の年代とする解釈も<sup>18)</sup>、想定よりも以後の年代と考える解釈も存在する。しかし、想定より以前の年代とする解釈は、その論拠が決定的なものとはいえ、説得力が高いとはいえない<sup>19)</sup>。想定よりも以後の年代と考える解釈が依拠する論拠は、主として、この文書が、プラトンやアリストテレスなどの後の時代の思想の影響を受けているというところにある<sup>20)</sup>。それゆえ、この解釈の妥当性に関しては、プラトンやアリストテレスからの影響があるのか否かが問題となるが、そのような影響を想定する必要は、必ずしもないと思われる。この文書の中に登場するそうした発想は、みな萌芽的なものである。それゆえ、この時期に存在していた、萌芽的な発想が、プラトンやアリストテレスによって発展させられたと考えることも可能なのである。

さらに、われわれは、『ディッソイ・ロゴイ』の内容の多くに、紀元前五世紀の作家たちとの呼応関係が見られるという事実にも着目すべきである。のちに詳しく論じるように、この文書に登場する民族学的記述には、ヘロドトスと

の密接な呼応関係が見られ、この文書が、この時代の関心の中で書かれていることを示しているのである。このほか、この文書には、エウリピデスとの関連も指摘されており<sup>21)</sup>、著者が、こうした同時代の作家を念頭に本書を書いていた証拠と見なすことができる<sup>22)</sup>。

このように、総合的に判断すれば、この作品が紀元前400年前後のソフィストの影響を受けた文化的風土の中で書かれたとする解釈は、十分に妥当なものだと考えることができる<sup>23)</sup>。

## 2. 『ディッソイ・ロゴイ』の内容と執筆目的

### 2.1 1～4章の議論の内容

この文書は、9つの章から構成されている。このうち、前半の1～4章の各章の議論は、次のような共通の構造を持っている。

- (i) 一組の対立項が提示される。
- (ii) 対立項が同じものだという主張が提示され、論証される。
- (iii) (ii)に反対し、対立項は互いに異なるものだとする主張が提示され、論証される。

1章の議論を例に、具体的に見てみよう。

(i) 「よいこと」と「悪いこと」という対立項が取り上げられ、これらが同じものだとする議論と、異なるものだとする議論が対立していることが指摘される（1節）。(『ディッソイ・ロゴイ』すなわち「対立する議論」という書名は、これに由来する。)

(ii) つぎに、「同一のことが、ある者にとってはよく、ある者にとっては悪い」という主張の具体例が列挙されていく。たとえば、「病気は、病人にとっては悪いが、医者にとってはよい」とか、「死は、死ぬ人にとっては悪いが、葬儀屋と墓堀人にとってはよい」といった具合である。前半部の議論の大部分は、こうした具体例の列挙に終始している（2～10節）。

(iii) つぎに、「よいことと悪いことは、互いに異なる」という主張が提示され、両者を同一とした場合に生じるパラドクスが、具体例とともに列挙される。たとえば、「もし、よいことと悪いことが同一であるとしたら、両親によいことをした者は、同時に、両親に悪いことをしたことになってしまう」といった例である。後半部の議論の大部分は、こうしたパラドクシカルな具体例の提示で占められている(11~16節)。

2章(「美しいこと」と「醜いこと」と3章(「正しいこと」と「不正なこと」)の議論も、基本的にこれと同一の構造を持った議論が展開されている。

4章(「真なる言明」と「偽なる言明」)についても、構造は同じであるといえるが、論証の内容は、異質な点が多い。すなわち、1~3章のように、たくさんの具体例の列挙ではなく、理論的な説明がなされているのである。

そこでは、両者の同一性の主張は、真偽の定義にもとづいてなされている。著者によれば、言明の真偽は、言明が事実と一致するか否かによって決まる。それゆえ、同一の言明であっても、この一致いかんによって、真とも偽ともなるというのである。

他方、両者が異なるという主張については、著者は、論理的なディレンマによって論証しようとする。著者によれば、両者が同一であるという主張そのものが偽であるとしたら、両者は異なることになり、また、真であるとしたら、その主張は同時に偽であることにもなってしまうというのである。

## 2.2 5~9章の議論の内容

後半部の議論は、前半部とは異なり、雑多な内容が論じられており、相互の関連は薄い。

まず、5章では、ひとつのパラドクスが持ち出され、それが批判されている。パラドクスというのは、「同一のものごとに、相反する性質が付帯する」というものであり、たとえば、同じ発言や行為が、賢いものにも愚かなものにもなるとか、同じものが、大きなものにも小さなものにもなるといったものである。

これに対して、著者は、たとえば発言や行為であれば、それがなされる文脈が適切か否かによって、その性質が変化するのであり、なにごとであれ、ものごとは特定の観点のもとで、特定の性質を持つのだと述べている。

6章では、知恵と徳は教えることも学ぶこともできないという主張が取り上げられる。これは、ソフィストの教育に対する当時の批判である。著者は、まず、この主張の論拠を5つ列挙したあと、それぞれの論拠が成り立たないことを示し、ソフィストによる徳の教育が有効であると主張している。

7章では、役職者を籤によって選ぶ民主制の方法が取り上げられ、それが間違った方法であることが論じられていく。著者は、ほかのさまざまな技術を例にして、籤引きで仕事を割り当てるのは不合理であると指摘する。そして、そのような方法は、民主制の批判者に権力を与えてしまう可能性があるため、かえって危険であると主張している。

続く8章では、ひとりの人間が持つべき諸能力をめぐる解説がなされている。著者によれば、短い言葉での対話や、真理を知っていること、法的判断能力を持つこと、演説能力を持つことは、同一の人物と技術に属しており、ひとは、すべてのものごとを知っていれば、それ以外の様々な能力も有しているという。この奇妙な主張は、後に詳しく論じるように、ソフィストのヒッピアスの立場と密接に関連するものと思われ、おそらくは、ソフィストが持つべき能力について論じられていると考えられる。8章において、著者は、この主張が真実であることを、さまざまな論拠を提示して、論証しようとしている。

最後の9章では、記憶の技術が取り上げられる。そこでは、記憶の技術の重要性や、具体的な記憶の技術が解説されている。すなわち、何かを聞いたら、繰り返し復習をして、記憶すべきであるが、そのさいには、自分の知っているものに関連づけて記憶するべきである。（たとえば、「クリュシッポス」という名前は、金（クリュソス）と馬（ヒッポス）に関連づけるといったふうに。）しかし、テキストはここで途切れている。

### 2.3 「ディッソイ・ロゴイ」の目的

以上のように、この文書は、1～4章に共通の構造が見られる以外は、互いに関連の薄い多様な話題が論じられている。いったい、著者は、何を目的として、この文書を執筆したのであろうか。

まず、1～4章の議論の意図を考えよう。ここでは、対立する二つの立場が提示され、論証されるが、著者は、どちらかの立場に与することなく、両方の立場を併置させている。おそらく、ここでは、対立する二つの演説が並列的に記録されているのだと考えることができる。議論は「わたし」という一人称によって語られているが、それは著者自身ではなく、二つの演説の想定された演者であろう<sup>24)</sup>。

これは、1～4章が、模擬論争のサンプルである可能性を示唆している。このような視点から、5章以降の議論を見ると、そこには、模擬演説と見なされる内容が含まれていることに気づく。すなわち、5, 6, 7章である。これらはいずれも、何らかの主題をめぐる、特定の立場が主張されているからである。

ここから、1～7章は、弁論術の暗記用素材であった可能性が浮上する。アリストテレスの証言にもあるとおり (*Soph. El.* 1183b36-1184a1)、初期の弁論術の訓練は、主に暗記によるものであり<sup>25)</sup>、弁論術の教師は、サンプルの演説を学生に丸暗記させていたと考えられる。これらの章は、このような弁論術の訓練に使われていたと考えることができるであろう。

ただし、われわれは、残りの8・9章については、このような用途を想定できない。というのも、これらの章は、ソフィストの弁論の技術をめぐる一般的な解説、あるいはその技術の具体的な方法の解説であり、暗記を目的としたものとは思えないからである。そうすると、この文書は、単なる暗記用素材ばかりでなく、弁論の技術をめぐる一般的な解説も含んだ文書だったことになる。

以上から、この文書が、ソフィストの弁論の技術をめぐる総合的なテキスト(あるいは講義の原稿)であったという可能性が浮かび上がる。すなわち、この文書は、弁論の技術をめぐるさまざまなトピックを集めたものであり、その中には、論争や演説の暗記練習に使えるような、ソフィストの思想を題材にし



た素材も含まれていたのである<sup>26)</sup>。

『ディッソイ・ロゴイ』を、このような性格の文書と考えることで、説明可能となる問題がある。それは、この文書に関する古代の証言が皆無であるにも関わらず、それが懐疑主義の時代まで伝承されたのはなぜかという問題である。もしこの文書が、思想書として書かれ、流通していたものであるなら、古代の証言において言及されないのはおかしい。だが、それが教育用のテキストであるとしたら、そのことに不思議はない。すなわち、この文書は、教育用テキストとして、教育の実践の中で伝承され、使われ続けていた。それが、後の時代になって、懐疑主義者の何者かによって、懐疑主義にとって有用な哲学的議論を含む文書と認識され、哲学の写本の中に保存されたのである。

### 3. 『ディッソイ・ロゴイ』にみられる思想的影響

この文書から読みとれる思想的影響は、多様なものであり、著者は、紀元前五世紀における多様な思潮の影響を複層的に受けていると考えられる。以下、詳しく考察しよう。

#### 3.1 民族学的関心

2章では、美しいことと醜いことの対立をめぐる相対主義の立場が登場するが、そこでは、周辺地域の民族の多様な風習が記述され、何を美しいふるまいとみなし、何を醜いふるまいとみなすかをめぐる、文化相対主義的な主張が展開されている。

すでに指摘したように、そこには、紀元前五世紀の作家たちとの著しい呼応関係を見ることができる。このうち、呼応が最も顕著なのは、ヘロドトスである。たとえば、2.14において、『ディッソイ・ロゴイ』の著者は、マッサゲタイ人の風習にふれ、「マッサゲタイ人は、自分の親を切り刻んで食べる。そして、子どもたちの中に葬られることが、最も美しい葬儀だと思われる」と述べているが、より詳しい説明が、ヘロドトスにも登場している。それによれば、マッサゲタイの国では、高齢に達した者がいると、縁者が集まって、その人物

を殺して、家畜と一緒に煮て食べてしまうが、この国では、それが最も幸福なことだと見なされているという（ヘロドトス1.216, cf. 3.38）。さらに、2.16における「リュディア人には、若い娘は売春して金を稼いでから結婚するのが美しいことだと思われる」という記述とほぼ同じ内容が、ヘロドトスでも指摘されている（ヘロドトス1.93）。

こうした、異文化の特殊性をめぐる情報は、おそらく当時のギリシア人たちの間に共有されていたものであり、『ディッソイ・ロゴイ』の著者は、そうした紀元前5世紀の情報を利用しているのだと考えられる。

また、このような異民族の具体的な風習だけではなく、特定の文化に対するステレオタイプ化された見方にも、共通性が見られる。たとえば、エジプト人の風習はギリシア人の風習と比べてすべてが正反対だという記述（2.17）は、ヘロドトスにおいても登場し、エジプト人の特質を現わすものとして強調されている<sup>27)</sup>。

ヘロドトスと同様の共鳴関係は、エウリピデスとの間にも見ることができる。スパルタ人の若い娘にとっては、運動をしたり、腕を隠さずに外套なしで出歩くことが美しいことだという記述（2.9）や、テッサリア人にとって、みずから牛の肉を切り分けることが美しいことだという記述（2.11）などである<sup>28)</sup>。

このような照応関係は、当時のギリシア世界において、自文化と異文化との相違が明確に意識されるようになり、その相違をめぐる共通の認識が形成されていたことを意味している<sup>29)</sup>。おそらく、当時、このような異文化の風習をめぐる共通の資料が存在し、そのような共通の情報に基づいて、相対主義的な言説が提示されていたのであろう。『ディッソイ・ロゴイ』の著者は、当時のそうした民族学的文化相対主義の影響下にあり、その具体的な姿を伝えているのである。

### 3.2 プロタゴラス

1～4章において提示される相対主義的な立場や、二つの対立する議論を提示する手法、さらには、6章における、徳の教育をめぐる議論など、著者が、

プロタゴラスから大きな影響を受けていることは明らかである<sup>30)</sup>。とりわけ、6章における徳の教育可能性をめぐる議論は、プラトンの『プロタゴラス』において提示されている議論との共通性が大きい<sup>31)</sup>。

6章では、まず、「知恵と徳は教えることも学ぶこともできない」という議論の存在が指摘されるが、これは、『プロタゴラス』319a-320bにおいて提示されている問題である<sup>32)</sup>。

著者は、この議論が提示している理由を、五つ列挙する。

1. あなたが、なにかをほかの人に与えるなら、それをなお自分で所有していることは不可能であろう（6.2）
2. もしそれが教えることのできるものであったなら、さまざまな技芸の場合と同様に、教師と認められている人々が存在していたはずである（6.3）。
3. ギリシアにおいて知恵のある者となった男たちは、彼らの子どもたちや友人たちに、それを教えていたことであろう（6.4）。
4. これまでソフィストたちのところに行った人々はいるが、彼らはなんの利益も得なかった（6.5）。
5. ソフィストと交際しなかった多くの人々が、言及に値する人物になった（6.6）。

このうち、第一の理由については、プラトンにおいては登場していない。だがそれは、この理由が、ソフィストの詭弁的な議論に由来する理由だからだと考えられる<sup>33)</sup>。

その後の4つの理由は、すべてプラトンの議論と関連している。

第二および第三の理由については、まったく同じ理由が『プロタゴラス』（324d ff.）において提示されており、このうち、第三の理由については、例示としてポリュクレイトスが挙げられているところまで共通している（328c）。

第四の理由は、プラトンにおいては、理由として明示されることはない。しかし、われわれは、『プロタゴラス』において、ソクラテスが、プロタゴラス

のもとで学ぶことによって、どのような利益が得られるのかを明らかにするために、対話をしている点に注意する必要がある。すなわち、この作品全体が、第四の理由に基づいて動機付けられているといえるのである。

第五の理由についても、「プロタゴラス」の中に、明確に登場してはいない。だが、この作品の中でのプロタゴラスの発言には、『ディッソイ・ロゴイ』の著者による反論との呼応が見られる。すなわち、著者は、生まれ持った才能(ピュシス)によって、ソフィストから学ばなくても徳を身に付ける者がいると述べているが、プロタゴラスもまた、同様の可能性を認めているのである(327bc)。

これ以外にも、徳は、ソフィストだけではなく、父母からも学ぶのだとされている点や、徳を学ぶことを、言葉を学ぶことになぞらえる手法など(6.11)、プロタゴラスの議論との重なりは多い(325c ff., 327d ff.)。

以上のように、6章の議論と、『プロタゴラス』の議論には密接なつながりが存在する。それは、この文書の執筆時期には、プロタゴラスに由来する論争の共通のトポスがすでに存在していたことを示唆するように思われる。

### 3.3 ヒッピアス

ヒッピアスからの影響の程度については、論者によって評価が異なる。たとえば、DupreélやUntersteinerは、ヒッピアスからの影響を強調するが<sup>34)</sup>、Robinsonは、彼らに批判的である<sup>35)</sup>。そのような対立が生じる原因は、ヒッピアスの思想が具体的にどのようなものであったのかを特定することが難しい点にある。とりわけ、主要な情報源であるプラトンの証言をどの程度信頼するかによって、立場は大きく異なってくる。

ヒッピアスの影響が強いとされるのは、8章と9章である。

8章ではまず、さまざまな能力が列挙され、それらの能力が、同一の人と同一の技術に属するのだと主張されている。さまざまな能力として列挙されているのは、①短い言葉で対話することができること、②さまざまなものごとの真理を知っていること、③正しい法的判断ができること、④民衆の前で演説がで

きること、⑤議論の技術を知っていること、⑥すべてのものの本性について、それがどのようにあり、どのように生じるかを教えることができること、の六つの能力である。

これらの六つの能力が属する同一の人と技術とは、何であろうか。おそらく、ソフィストとその技術であると考えるのが、もっとも妥当であろう。①の能力については、ソクラテスとの関連が指摘されることが多かった。しかし、すでに考察したように、それ以外の能力は、むしろソクラテスの立場に相容れないものであり、どうして著者が、ソクラテスの対話を、このような文脈に入れたのか理解できなくなる。それゆえ、①の能力は、むしろ、ソフィストたちの議論のスタイルの一つと考えたほうが、整合的なのである。

それ以外の諸能力のうち、③④⑤をソフィストの技術に帰属させることには、なんら問題はない。これらの技術は、法廷演説や議会演説に密接に関わるものであり、ソフィストの弁論術が必要とする能力だと考えられるからである。

では、②と⑥については、どうだろうか。②については、みずからを知者と標榜するソフィストには、必要な能力であったかもしれない。しかし、⑥では、すべてのものの本性について教えることができなければならないとされており、非常に厳しい要求がなされている。はたして、ソフィストの技術に、そのような能力が必須とされていたのであろうか<sup>36)</sup>。

この点で、研究者たちが着目したのが、ヒッピアスである。というのも、ヒッピアスは博識家であり、さまざまな技術を習得していたと証言されているからである (*Hipp. Min.* 368b ff.)。また、⑥に登場する「本性 (ピュシス)」という言葉も、この概念を習慣 (ノモス) と対立させて強調するヒッピアスの思想 (cf. *Prot.* 337cd) と整合的と考えられた<sup>37)</sup>。それゆえ、ここで提示されているソフィストの技術の条件は、ヒッピアスの思想の影響を受けたものではないかという解釈が生まれたのである。

こうした見方に対する批判が存在するのも事実である。Robinson は、ヒッピアスをめぐる証言の内容と、8章で述べられている内容との隔たりを指摘している<sup>38)</sup>。すなわち、証言では、ヒッピアスは、あくまでもたくさんの技術を

習得した博識家として描写されており、たしかに、さまざまな事柄を知っているとされているが、すべての事柄の本性を知っているとはまでは言われていないのである。また、ヒippiアスの強調する本性とは、習慣（ノモス）に対比される意味でのピュシスであり、必ずしも、ものが持つ本性を意味するわけではない。

だが、このような批判は回避することができると、わたしは考える。たしかに、証言では、ヒippiアスは、すべてのものの本性を知っていると、教えると言明はしていないが、『プロタゴラス』では、自然と天体をめぐる問題について、学生たちからの質問に答えている姿が描写されているのである（315c）。

さらにわれわれは、8章の議論では、問題の人物は、必ずしも、あらゆる技術を現実に習得している必要はないという点に注意する必要がある。じっさい、8.8では、問題の人物は、たとえ笛の吹き方を知らなくても、その必要が生じれば、吹くことができると述べられている。8章において重視されているのは、すべての技術を習得しているということではなく、正しく語る技術を習得していることである（8.6）。というのも、それができれば、彼は、すべてのことを知り、あらゆる状況で適切なふるまいをすることができるからである（8.7）<sup>39)</sup>。ここから考えると、著者が言いたいのは、問題の人物は、文字どおりの意味であらゆる知識を持っているということではなく、むしろ、正しく語る技術を持つことによって、あらゆる事柄を正しく行う力を潜在的に有することになるということだと思われるのである。

ところで、このような想定が成り立つためには、ものごとの正しいありかたが、すべてを貫いて共通しているという前提が必要であろう。すなわち、ここで語られている「すべてのものの本性」とは、それぞれの事物が持つ諸本性の集合ということではなく、全体に共通する本性なのだと考えなければならないのである。

ヒippiアスが、じっさいに以上のような考えかたを提示している証言がある。すなわち、プラトンの『大ヒippiアス』において、ヒippiアス自身の口から述べられる見解である。

まったく、ソクラテス、きみというひとは、ものごとの全体をよく見ていない。きみがいつも対話しているひとたちもそうだ。きみたちときたら、美しいものばかりでなく、ほかのいろいろなものを、切り取ってはぶっ叩き、言葉によってばらばらにしているのだ。そんなことをしているから、きみたちには、それらがいかに大きなものかがわからないのだ。それらは、がんらい、存在の連続体であるというのに。(Hipp. Mai. 301b)

ヒippiアスはここで、美しいものをはじめとするさまざまなものは、大きな存在の連続体であると主張し、それを切り離して、ばらばらに考察しようとするソクラテスの探究方法を批判している。この発言は、『ディッソイ・ロゴイ』8章における発想と整合的である。それゆえ、この発言が歴史的ヒippiアスに由来するものであるとしたら、それは8章の記述とつながり、この章がヒippiアスの影響下にあることを示すものとなるであろう。

また、9章では、記憶術の重要性と、その具体的な方法が論じられており、これもヒippiアスとの関連が深いと考えられる。じっさい、ヒippiアスの記憶力と、彼の記憶の技術に関しては、多くの証言が残されており<sup>40</sup>、彼が当時の記憶術の第一人者だったことは確かなことである。

もちろん、当時、記憶術は一般的なものになっており、弁論術の普及に伴って、その重要性は増大していた<sup>41</sup>。それゆえ、記憶術の伝授は、ヒippiアスだけでなく、多くのソフィストがおこなっていたであろう。それゆえ、ここでの記憶術への言及が、ヒippiアスの影響によるものなのかや、ここで提示されている具体的な記憶術が、ヒippiアスのものなのかについては、なにも確定的なことはいえない。ただ、8章に対するヒippiアスの影響から判断すれば、9章も、ヒippiアスの影響力が強く働いている可能性は高いといえるだろう。

### 3.3 ゴルギアス

著者に影響を及ぼしたソフィストとして、ゴルギアスが挙げられることがある。だが、ゴルギアスの影響は、プロタゴラスやヒippiアスと比較すると、断

片的なものだと考えられる。というのも、その影響が見られるのは、「好機(23章)」や「欺き(2章)」といった、ゴルギアスに特徴的な用語の使用に限られ、このような用語が、著者の思想にどの程度本質的な影響を与えているかについては、議論の余地があるからである<sup>42)</sup>。

### 3.4 ソクラテス

さらに、ソフィスト以外で、著者に影響を与えている思想家として、ソクラテスが挙げられることがある。しかし、ソクラテスについても、その強い影響を認める論者<sup>43)</sup>と、それを否定する論者の間で、評価は分かれている。

ソクラテスの影響を認める論者が持ち出す論点は、大きく二つある。

一つは、ソクラテスの対話的方法の影響である。1章(12, 13)では、ソクラテスの対話を模倣したかのような仮想対話が導入され、批判に使われている。また、8章では、ソフィストの技術に属すべき能力のひとつとして、「短い言葉で対話すること」が挙げられており、これがソクラテスの対話の能力を意味すると見なされることも多い。

だが、われわれは、ここでの「対話」をソクラテスに関連づけることには慎重でなければならない。なぜなら、短い言葉での一問一答の対話によって議論を進める方法は、ソフィストの議論の方法でもあるからである(cf. *Hipp. Min.* 363d, *Prot.* 329b, *Gorg.* 449c)<sup>44)</sup>。それゆえ、1章12,13節の対話は、ソフィストの手法を提示したものである可能性も否定できないのである。同様に、8章における「短い言葉で対話すること」も、ソフィストに求められる能力として提示されていると考えたほうがよい。じっさい、著者が述べている諸能力は、必ずしもソクラテス的なものではなく、とりわけ、「さまざまなものごとの真理を知っている」や「すべてのものの本性について、それがどのようにあり、どのように生じるかを教えることができる」という能力は、ソクラテスの思想とは相容れない要素が大きい。したがって、対話という論点は、必ずしもソクラテスの影響によるものではないと考えられる<sup>45)</sup>。

もう一つは、7章における役職の籤引き制度の批判を、ソクラテスの批判に



重ねる解釈である<sup>46)</sup>。

たしかに、ソクラテスが、籤引き制度を批判していたという証言は、複数存在している（*Xen. Mem.* 1.2.9, *Arist. Rhet.* 1393b4-5）。また、批判の論拠についても、共通性が見られる。というのも、いずれにおいても、籤引き制度が批判される論拠は、籤引きでは、職務に対して適切な能力を持った人物が選ばれないという点にあるからである。

だが、このような民主制批判が、ソクラテスからの直接的な影響によるものかについては、明確とはいえない。というのも、このような民主制批判を展開したのは、ソクラテスひとりではなく、おそらく、この時代には、同様の批判が広くなされ、論争されていたと考えられるからである<sup>47)</sup>。そもそも、ソクラテスが籤引き制度を批判したという主張は、ソクラテスの死後、ソフィストのポリュクラテスによって著された告発文に由来する可能性が高く、おそらく、反民主主義者を批判するさいの、当時の共通の論点にもとづいたものだと考えられるのである。

また、民主制に批判的なソフィストが存在していた点にも注意する必要がある。たとえば、弁論家のアンティフォンは、紀元前411年に成立した寡頭制政権に参加している。このアンティフォンが、ソフィストのアンティフォンと同一人物であるとしたら、ソフィストたちの中にも、民主制に批判的な立場の者が存在していたことになる。本文書の著者が、そうした民主制に批判的なソフィストから影響を受けている可能性も否定できない。

いずれにせよ、民主制に対する批判的な態度は、少なくとも、プロタゴラスのようなソフィストには見られないものであり、著者が、プロタゴラスとは異なる思想の影響を受けていた証拠となるであろう。

（以下、次号）

本研究は JSPS 科研費25370036 の助成を受けたものです。